

中央公園(20240109-20240209)  
減多少増

真夜中に中央公園を通り抜けようと思ったのはなぜだったろうか。

深夜でも公園は取り囲まれているビルの灯りで隅々まで見通せる。タチの悪い乱暴者が潜んでいればすぐにわかるはずだ。それでも、夜の闇の塊はあちらこちらにおちているだろう。そんな公園を誰が通り抜けようとしたのだろうか。

真夜中に中央公園を通り抜けていったのは誰だろう。

それは公園の向こう側にある託児所に預けていた子供を引き取りに行こうと考えていた誰かかもしれない。託児所の終了時間が迫っていて公園を通り抜けなければ間に合わなかったのだろう。子供を引き取りに行くのは母親だろうか、父親だろうか、それともそれ以外の家族だろうか。

あるいは公園の向こうで燃えている倉庫の消火に向かう消防士ではないだろうか。消防車が公園を迂回しては間に合わないと判断した消防士が、燃えている倉庫への最短コースとして公園の中の道を疾走していたのかもしれない。それにしても、たった一人で現場に向かうことなどあるだろうか。仲間と一緒に走っていたのではないだろうか。

あるいは公園の向こうの、くねるネオン輝くダンスハウスを目指す愉快的ダンサーではないのだろうか。公園の中の遊歩道で跳んだり回転したりあるいは逆立ちをしたりして、なかなかダンスハウスにたどり着けない間抜けなダンサーなのではないだろうか。

あるいは公園の向こうに自宅があり、仕事で遅くなった帰路を急いでいた会社員ではないだろうか。一日の仕事あるいは数日の激務で皺だらけになったスーツを気にもせず、いつもと同じように公園の中の道を通り抜けようとしている勤勉な会社員ではなかっただろうか。

あるいは公園の向こうの宝石店に展示されている今や町で一番有名な宝石「エピクト王の黒太陽」を盗みに入ろうと考えている泥棒ではないだろうか。計画ではあと五分で仕事を始めなくてはならない。準備に三ヶ月もかけてきたのだからこの機会を逃すわけにはいかない。すこし足早に公園を駆けているのは宝石を狙う泥棒ではなかったのだろうか。

あるいは口の中に図書館を所有し、いずれ博覧強記の万物学者になるであろう千物博士ではないのか。中央公園の植物相と動物相に計り知れない好奇心を抱く博士ではないのか。博士の熱く深い観察によって、もはや公園の植物はすべて枯れ果て、動物はいずれも蛆虫に退化してしまっているとしても、博士の観察は終わらない。

あるいは間違って靴を捨てた誰かがその靴を見つけ出そうと公園の向こうにある靴捨て工場に向かっているのではないだろうか。靴捨て工場の機械音は毎日明け方まで続いている。石油は使わないのでみつけだした靴に油のにおいは感じられないだろう。それでも靴の色は元と違っていているかもしれない。

あるいは火星に向かうロケットに乗り込むために、公園の向こうにある発射台に向かっている宇宙飛行士ではないだろうか。発射を待つロケットの噴射音が夕方からずっと続いていておそらく

町の誰一人眠れなかつただろう。宇宙飛行士は重い宇宙服と宇宙靴を引きずりながらゆっくりと公園の道を歩いているのではないだろうか。

あるいは公園のどこかにある図書館から借りた本を返すために閉館時間ぎりぎりになってあわてている学生ではないのだろうか。すでに何週間も延滞していて、今日返さなければ二度と本を借りられなくなるだろう。宿題を片付けた学生が返す本でいっぱいのリュックをかついで公園を急いでいるのかもしれない。

あるいは公園の中央にある踏切りで、最終列車が通り過ぎるのを待っている鉄道マニアではないだろうか。時刻表の印刷ミスで、その最終列車は二週間も前に踏切りを通り過ぎてしまったというのに、鉄道マニアは一人で列車を待っている。それならば鉄道マニアは公園を通り過ぎることが目的だとは言えないだろう。彼は公園で何かを待っているだけの誰かだろう。

あるいは画家の描いた中央公園に土地に不案内な観光客が迷い込んだのではないだろうか。土地の者なら間違えるはずもないのだが観光客というものはえてしてありふれた境界を超えてしまうものだ。どこから来た観光客なのかはわからないだろう。足跡すらもはや残っていない。

あるいはテロリストのリーダーが中央公園の向こうにある元首官邸を襲撃するためにひそかに近づこうとしているのではないだろうか。五つの強力な空間浸透式対人爆弾を背中のリュックにひそませて、足音を忍ばせ、周囲への注意も怠らず、しかし堂々とした態度で公園の中を歩いていくはずだ。誰にもテロリストだと気づかれることはないだろう。

あるいは鳥でもないのに羽根を持つ誰かに呼び出された覚醒者が中央公園の向こうにある預言者の丘に行こうとしているのではないだろうか。五つの聖痕を体に現し正しい言葉しか使わない覚醒者はゆっくりと公園の道を歩いている。自分の進むべき道が輝いて見えるのだと今朝のテレビのインタビューで語っていた。彼は預言者なのだろうかそれとも偽預言者なのだろうか。

あるいは誰かの捨てた靴のちぎれた靴紐(右足)が中央公園の向こうに見える紐の再生施設に辿り着こうと身をくねらせ公園の歩道をのたうっているのではないのだろうか。いずれ深夜の清掃員が靴紐を蛇と誤認してゴミ挟みで摘んで捨ててしまうことになるだろう。靴紐は本当に右足のほうの靴紐だったのだろうか。

あるいはメガネを忘れて外出したため地下鉄の入り口と中央公園の入り口を間違えた大学生が特急乗り場に向かおうと公園の間違った道と言うよりは見当はずれな遊歩道を見当たらない時刻表を探しながら歩き続けているのではないか。構内アナウンスが五番ホームを案内しているのはヘッドホンのせいだろう。ヘッドホンの音声ケーブルは耳と何を繋いでいるのだろうか。

あるいはガラスで作られた王子の像の足がひび割れカラスに啄まれてついに碎け、高い台座からころがり落ちたのではないだろうか。ガラスの王子の身体は少しずつ碎けながら公園の中をころがっていったのではなかったか。大きな音がしたはずだが、それを聞いた者はひとりもいなかった。

あるいは中央小学校の高学年の生徒が妖精係の水曜の当番で妖精でもない人魚を抱えて、公園の向こうにある水族館へ連れて行こうとしていたのではないだろうか。人魚の鱗が生徒の胸に突き刺さり、生徒の血が流れだして公園に運河を作る。水族館の作り物の海水のにおいが風と混ざって公園にも漂うだろう。

そういえば深夜に公園で仕事をしている測量士は、もう仕事が終わっているのだろうか。深夜の闇の長さや幅や話によるとその温度も測量しているらしい。幸運ならば夜の間中、測量士が公園を出ることはないだろう。

あるいは生物細工の職人が中央公園の向こうにある土産物店にできあがったばかりの黴の置物を運んでいたのかもしれない。まったく精巧に作られた黴は繁殖もはやく、納品が一時間遅れば職人の全身が黴に覆われていただろう。深夜の土産物店にはあかりもついていないはずだ。公園の黴がいくらかなりと増えていたのなら、あれは生物細工職人が運んでいた黴の置物を落としたからなのではない。

あるいは市の安全管理に熱心な市長が真夜中の中央公園を視察に訪れていたのではないだろうか。市政に反対する二、三の団体が市長を追いかけていたかもしれない。それほど大勢で公園を歩いていたなら公園に真夜中は訪れないとは思わないのだろうか。自ら信じるものに夢中な者に真夜中はないのかもしれない。

あるいは新しいアプリを作ったプログラマーがテストのために公園を通っていったのかもしれない。公園を通り抜けるテストには三千ほどの項目があり大半は失敗しているだろう。公園には通信は届かないので障害報告は一週間経つまで担当部署に届かないはずだ。

あるいは新しい豆料理を思いついた料理人が虹色の豆を買い求めるために中央公園の向こう側にある豆市場へ近道をしようと公園の砂道を歩いていたのではないだろうか。早く行かなければ思いついた豆のレシピを忘れてしまうかもしれない。あわてているように見えたのあわてていたからだろう。必要な豆は5種類あり、豆市場に行きさえすればすべて手に入るはずだ。

あるいはいろいろなことを忘れた老人が公園の花壇に咲くひまわりをみつけて、迷い込んでいたのかもしれない。ひまわりは夜になると光を求めるあまり自分自身が発光するので老人の目にとまりやすい。真夜中まで輝いているひまわりには特別な思いがあるのだろうか。老人のメガネは前市長のメガネと同じ度数であり形である。

町の下水で生まれた兎は下水を流れてきた図鑑で見た熱帯魚から自分が生まれたのだと考えている。遠くで聞こえるざわめきは海が近いからだろう。ひんやりとした風に誘われてときどき下水口から外をみることがある。色彩はわからないけれど何かかたまりが動いているのは感じられる。初めて兎が下水口から中央公園に這い出したのが真夜中だったのかもしれない。

あるいはガラスの王子像を探していた歴史学者が中央公園の遺跡を探して真夜中だというのに花壇や噴水のまわりをうろついていたのではないだろうか。探すことに人生を費やしてきた歴史学者は、この町は当初から民主主義であり王家はなく王子など一度も存在しなかったのだとは知らなかったのだろう。

あるいは法律上は存在しない乞食が公園の芝生の上を這いずっていたのかもしれない。空腹だったので花壇の花を食い根を齧り、迂闊な雀さえ捉えて飢えをしのいでいたのだから、真夜中の公園のどこかに乞食の姿があったのではないだろうか。

あるいは盗賊の後継者が遺言に従って深夜の公園を彷徨っているのではないだろうか。遺言の中身は秘密にされているので公園の遊歩道もまた誰にも知られることはないだろう。「エジプト王の黒い半記憶」は盗まれたのだろうか。後継者はそれを確かめるために公園の向こうにある宝石商を目指すだろう。

もう十年以上働いているのに、仕事のことは何一つ覚えていない誰かは中央公園のことなら何でも知っていて隣の電話ボックスが火事になった夜にも一番に消防局に事件を伝えた。

あるいは体外に摘出された図書館が知識をあたりに撒き散らしながら新しい本を探して公園の向こうに見える巨大な書店を目指しているのではないだろうか。本には文字や絵や記号が書かれているのだが誰がそんなことを気にするだろうか。図書館が通り過ぎた後の公園には見捨てられた知識や概念が散乱し二時間もすると腐り始める。赤い花はあの赤い本の枯れた姿なのだろう。

あるいは珍しい血液型の誰かが同じ血液型の誰かをさがすため、真夜中の公園の向こうにある血液ビルに行こうとしていたのではないだろうか。血液ビルの壁面には血液が流れているという噂があり、真夜中になると全体が青くかすんでみえる。珍しい血液型の誰かは血液ビルを見つけられないかもしれない。

あるいは三階の踊り場にいた誰かが二階に降りようか四階に登ろうかと迷い、結局真夜中の公園の遊歩道で目的地を探していたのではないだろうか。公園の向こうには町で一番立派な階段が見えている。そのまま行けば一階に辿り着くのだろうが、その誰かが一階という階を知っているかどうかは疑わしい。

あるいは不愉快な横断歩道の信号機が誰かを困らせようと公園の中で歩行者を探してしたのではないだろうか。横断歩道の信号機は一定の時間をおいて赤と緑に色を変えるから、公園のカラスはそのたびに騒ぎ立てるだろう。信号機は硬い素材でできているので嘴を怖れることはないだろうが、カラスの糞にまみれて公園のどこかで動けずにいるのかもしれない。

あるいは見捨てられた民族の最後の生き残りが新しい仲間を探して真夜中の公園で仲間を呼び寄せる歌を歌っているのかもしれない。その言葉もまた見捨てられているので昼間の公園の利用者からは軽蔑しか受けないだろう。それでも真夜中は彼らのものだ。

あるいは自分を昆虫ではないかと疑っている哲学者が公園の草むらで自分の仲間である昆虫を探しているのかもしれない。手足は六本もなく、目は複眼ですらない。関節で呼吸をしないし、血液も緑色はしていない。哲学者には自分を昆虫だと思いひまわりではないと信じる理由ならいくらでもあるはずだ。

あるいは単語変換できない最初の誰かが真夜中の公園でうずくまっているのかもしれない。芝生の土を舐めながら息もせずしっかりと目を閉じているのでそこに誰かがいることさえ誰も気づかないだろう。そのうえ自分は文字ではないと言い張るものだから、誰も変換しようとさえしない。単語変換できない最初の誰かは夜の間に自分自身を変換しなくては生きている価値がないとつぶやいている。

あるいは傘屋の親方になりたい誰かが弟子を求めて真夜中の公園を探しているのかもしれない。親方になりたい誰かは傘を作れるので雨などものともしないが弟子がいなければ親方にはなれないという組合の規則により誰も親方になりたい誰かを傘屋の親方と呼ばない。真夜中に公園を歩く若者などいるはずもなく親方になりたい誰かは夜の間に親方にはなれないだろう。

あるいはただめずらしいだけの血液型が真夜中の公園を散歩しているのではないだろうか。日頃から血液型をうるさく言われるものだから真夜中くらいはそれを忘れて公園を散歩しようと歩いていたのかもしれない。血液型は性格よりも幾何学に興味を持っている。血液型のただ一つの望みは、公園のむこうに見えるすべての建造物を幾何学的に分類することだったのではないか。



あるいは中央公園を監視する誰かが公園の隣にある電話ボックスに飽きて、公園の中にある遊歩道を調査していたのではないだろうか。そのスパイが誰のために何をスパイしていたのかはわからない。何かを報告したのかまたは何も報告すべきことがなかったのかもわからない。スパイは公園の向こうにあるスパイ養成学校に気づきもせず公園の中を歩き続けているのではないだろうか。

あるいは信号機の壊れた交差点が公園の中で法規を適用すべき車両を探していたのではないだろうか。異なる方向から交差点に入ろうとする車はお互いに相手の思惑を探り合い、何も確かなことがわからなければそのまま交差点に突入し交差点の中央で衝突するだろう。交差点の楽しみはその混乱を眺めることだけなのに違いない。公園の中では誰もが退屈しているから信号の点滅順序も法律には従わないだろう。

あるいは自分を南極大陸だと信じている誰かが中央公園の比較的冷たい薬局の受付でどこかに隠していた処方箋を取り出し長い旅に出るのだと説明する。帰省ですかと尋ねられても自分を南極大陸だと信じている誰かはとりあわない。薬局を出たあとは中央公園の裏口にある外洋港にむかい、手に入れた薬をすべて飲んでしまったのではないだろうか。確かに薬は無駄にはならないが命の保証はないだろう。

あるいは故郷から遠い町を訪れた旅人が本物そっくりの絵から抜け出したところそこが公園だったのではないだろうか。旅人はいまだに絵の中にいたことに気づいていないので、公園の高い木の梢の向こうに見える画家の絵筆を流れ星だと信じているのだろう。

あるいは金星の親になりたいという誰かではないだろうか。金星は空のいたるところに輝き、しばしば太陽と見まごうばかりだ。深夜に中央公園を照らしているのが月ではなく金星だと言われれば疑う者はいないだろう。金星の親といっても父親なのか母親なのかあるいは単なる育ての親なのかは本人にも確かではない。

あるいは両親を探して託児所を抜け出した子供が公園の中にいる象やキリンやカッパの遊具と仲良く遊んでいるのかもしれない。真夜中だというのに公園は明るくブランコも揺れている。砂で作られた城の中には忘れられた王子の記録が今も残されているだろう。子供はいつまでも遊び続けているのに違いない。

あるいは公園の門の鍵をかけるため北門から南門へと向かっていた公園の守衛なのではないだろうか。だとすればもうすでに北門の鍵はかけられ、そこから公園に入る者はいないのだろう。それにしても、南門から中央公園に誰が入るというのだろう。南門は中央公園が開設されてから一度も開かれたことなどない。そもそも北にも南にも公園に門などありはしない。

公園にはライオンが潜んでいる。若いメスのライオンであり、いつもお腹を空かせている。お腹を空かせているのは横で眠っているライオンの子供たちかもしれない。だとすれば、メスはそれほど若くはないのだろう。公園を通り過ぎようとする者がいるかぎり、ライオンの親子は幸福である。

夜になると中央公園の上空には黒い雲がたちこめる。そして真夜になれば雲から公園へたくさんの影が降ってくるだろう。あるいは公園をさまよっていたのはその影だったのではないだろうか。月食の夜ともなれば影の影が公園で踊り始める。影は音を立てずにいつまでも踊り続けるだろう。

あるいは託児所から抜け出した子供はライオンの子供なのかもしれない。託児所から逃げ出した人間の子供を追いかけて公園に迷い込んだライオンの子供かもしれない。子ライオンはすでに満腹しているので、遊び相手を探しているだけなのだろう。それでも人間をみつければとびかかることになる。母親は子ライオンのにおいを追って公園を彷徨っているかもしれない。その途中で人間の子供をみつけるだろうか。我が子のためにその人間の子供の首を折り、どこかの木の根元に隠しておくだろうか。子ライオンは母親に見つかることもなく草むらで眠っている。

あるいは二階へ登る階段を見つけた誰かが公園に残してきた荷物をとりに水飲み場に戻ってきたのかもしれない。水飲み場は深夜の闇にひんやりとして硬い。三階から降りてきた誰かにとって水飲み場の寒さは厳しいはずだ。荷物は見つかったのだろうか。それとも荷物はすでに誰かに盗まれていたのだろうか。

真夜中の公園を通り抜けようとしたのが誰だろうかと考えていたのは誰だろう。もはや真夜中の公園を通り抜けてしまったかもしれない者は一人もいなくなってしまった。存在しない彼らについて考える誰かもまたすでにいないのだろう。ライオンもいずれ消えてしまうだろう。真夜中の公園も画家によって消され、朝には何か細かい花びらの花の絵が描かれることになるはずだ。